

# 抗日戦争時期における巴金の死生観 ——大衆動員との関連性——

近藤 光雄

## 要 旨

日中戦争前夜、巴金は度々自他の死について語り、死とは個人における集団や民族との融合であるとの死生観を表明した。このような自己拡張の思想は、ギュイヨーの説く自己犠牲の精神及びクロボトキンの説く互助によって支えられていた。日中戦争が勃発した後、巴金は戦死者や戦時下に生きる大衆の行動のなかに、個人の死を民族の生存の維持に結びつける互助及び自己犠牲の精神を見出した。抗日戦争を阻む勢力が現れるなか、巴金は民族解放のために更なる大衆動員を図ることの重要性を説き、互助及び自己犠牲の精神を貫いた大衆運動を紹介した。このように、巴金は、互助及び自己犠牲の精神を抗日戦争における大衆運動の行動原理に据えると同時に、一連の言論を通して読者に民族解放への信念を抱かせ、抗日戦争への参加を促し、大衆動員を図ったのである。

## はじめに

日中戦争（1937年）が勃発する直前から戦時中にかけて、巴金（1904-2005）は自身の戦争体験を綴った散文や旅行記のほか、抗日戦争を題材とする小説『火』三部作（1940、1942、1945年）を発表した。これらの作品のなかで、巴金は度々自己と他者の死に言及し、戦死者や戦時下に生きる大衆の姿を多く描き出した。しかし、これまでの研究では、巴金が抗日戦争時期にどのような死生観を持っていたかについて考察したものは極めて乏しい。死と隣り合わせの環境のな

かで自他の死をいかに捉えたか、戦時中に自らの死生観を語ることの意義とは何かを考える上で、抗日戦争時期における巴金の死生観を考察しておく必要がある。

本稿では、1937年から1939年頃にかけて発表された巴金の散文や旅行記を中心に、彼の死生観について考察し、抗日戦争に対する基本的な姿勢との関連性について検討する。

## 一、抗日戦争前夜における巴金の死生観

1928年、巴金は日記のなかで死に対する二つのスタンスを表明した。彼はあるとき「突然、死が頭に浮かび、死が間近に迫っていると思ったが、こんなに若くして死んでしまうことを受け入れることができなかった。最大限の努力を払い死と格闘した末、遂に死に勝利した」。また、彼はある日「森のなかを一人で散歩していると、突然、一瞬死を目にした。心のなかはとても穏やかで、死も大したことはないと思った」。<sup>1</sup>ここには「自己の死」と「他者の死」という違いはあるにせよ、巴金は、迫り来る死への想像によって喚起される不安や恐怖を、己の生への意志によって克服する一方で、死を、いかなる感情をも呼び起こさない、穏やかで恐れるに足らぬものとして捉えたのである。

このような対立的な死生観は、巴金におけるかつての戦争体験から見て取ることもできる。1923年2月23日（旧暦）、四川成都で市街戦が発生し、城外に駐屯していた部隊が城内に向けて砲撃を加えた。巴金が暮らしていた屋敷に多くの砲弾が落下し、数間の家屋が爆破され、家族の者が悲鳴を上げながら逃げ回っていた。その最中、巴金は書斎に隠れ寝台の上に横たわり、屋根の上空を飛び交う砲弾の轟音を聞きながら、

---

<sup>1</sup> 巴金「死」（1937年3月）、巴金『夢与醉』（開明書店、上海、1938年9月）、1頁。

「……」今度はそれが僕の頭上に落下するだろう。僅か一瞬で、僕は暗闇に落ち、それ以降他人とは別の世界に隔てられるのだ。僕に残されるのは際限のない寂寞であろう。……このとき、僕は確かに甚だ大きな苦痛を感じた。死が僕を恐れさせたのではない。恐ろしいのは生死の間を彷徨うあの形のない感情なのだ。[……] <sup>2</sup>

と思った。砲撃によって命を奪われること、死とは「全くこの上ない寂しいもの」<sup>3</sup>であること、いつ訪れるとも知れない己の死を待ちながら生きなければならないこと、このような生死を巡る様々な想像が恐怖となって巴金を襲ったのであろう。

同じ頃、川黔（四川・貴州）軍が成都城内で市街戦を繰り広げていたとき、市街の中央で弾丸が爆発した。向かいの邸宅に仕えていた駕籠かきが知人と雑談をしていたが、胸に弾丸を受けると、

「……」彼は低い叫び声を上げ、手で胸を押さえながら地面に倒れた。人を驚かせるような動作は何もなかった。こんなに速く、こんなに簡単に、彼は命尽きたのだ。それは少しも恐ろしくはなかった。[……] <sup>4</sup>

というのである。人為的な戦闘のなかで流れ弾に当たり命を落とすという非自然的な死を、巴金は恐ろしいものとは感じず「簡単な死」と呼び、日常的なものとして捉えたようである。

これらの出来事は、抗日戦争が勃発する直前の1937年春に散文「死」のなかで書かれたものである。回想に基づく言及であるだけに、そこに現れた巴金の対立的な死生観は、彼が一連の出来事を体験した当初に抱いたものと同等であると

---

<sup>2</sup> 巴金「死」、巴金『夢与醉』、3頁。

<sup>3</sup> 巴金「死」、巴金『夢与醉』、2頁。

<sup>4</sup> 巴金「死」、巴金『夢与醉』、4頁。

は言えないにせよ、1937 年に至って大きく変化したように思われる。例えば、巴金は上記の砲撃の体験を振り返って、以前とは異なる心境を綴っている。

「……」もしあのとき、本当に一発の砲弾が屋根を突き抜け頭上に落下してきたら、私は「おしまいだ！」と叫んで心置きなく目を閉じたであろうし、ほかの思いを持たなかっただろう。私が用いた「心置きなく」という言葉がほかの人には奇妙に思われるかもしれない。しかし、実際には、張り詰めた心は突然和らぎ、名残惜しさ、懸念、恐怖、後悔、希望といったものは瞬く間にきれいさっぱり消え去り、心のなかは確かに空っぽだったのだ。[……]<sup>5</sup>

これに続けて、巴金はエドワード・カーペンター (Edward Carpenter 1844-1929) の著作『愛と死の戯曲』<sup>6</sup>に触れ、「ほとんどの場合、それ（死）は平和で静かな、ある深い安堵感を持ったものである」<sup>7</sup>と述べた。巴金はかつて感じていた恐怖を強調するのではなく、死を安らかに受け入れようとする穏やかな心情を重視するに至ったのである。

また、巴金は駕籠かきの「簡単な死」を回想した直後、再びカーペンターの言葉を取り上げながら、

「……」死者の顔はときには忘我の輝きを放つことさえあり、恰も新たな生命がすでに前以てその輝きを投げかけたかのようだ、と彼は言う。彼は、戦場で遺体の顔の上にこのような表情を認めたことすらあり、死とは生命の変化、内的な生命の解放であると考えているのだ。<sup>8</sup>

---

<sup>5</sup> 巴金「死」、巴金『夢与醉』、4 頁。

<sup>6</sup> Edward Carpenter : *The Drama of Love and Death*, London : George Allen & Company, Ltd. 1912. 和訳本は、カアペンター『愛と死の戯曲』（宇佐美文蔵訳、聚芳閣、東京、1925 年 5 月）。

<sup>7</sup> 巴金「死」、巴金『夢与醉』、4 頁。

<sup>8</sup> 巴金「死」、巴金『夢与醉』、4-5 頁。

と述べた。巴金は死に宿る新たな生命の力を見出そうとしたのであり、死を生命の終焉と考えたのではなかった。

かくして、かつて「自己の死」を恐れる一方で「他者の死」を穏やかなものとして捉えていた巴金は、自他に関わらず死というものを安らかに受け入れ新たな生命を誕生させる源泉として理解し始めたのである。

巴金のこのような死生観の変化において、「忘我」という概念が注目に値する。「我」すなわち「私」はその内部に「名残惜しさ、懸念、恐怖、後悔、希望」といった、砲撃の最中に巴金を感じたような多様な感情を持っていようが、そのような感情を忘却することによって何が実現されるのだろうか。このことを考える上で、死とは何かを巡る巴金の発言が示唆に富む。

〔……〕死とは「私」の拡張である。死去は同時に新生でもあるのだ。そのときには、「私」は宇宙全体やほかのあらゆるものに浸透する。山、海、星、樹木はすべてその人の体の一部となり、その人の心はあらゆる生き物の心と融合する。〔……〕<sup>9</sup>

死とは自然を構成する諸要素と「私」との融合であるというのだが、巴金はこのような自己拡張の可能性を、「私」と人類、個人と集団との関係のなかにも認めており、「個人の感情を大衆の感情に溶け込ませ、個人の苦楽を集団の苦楽に結びつけること」<sup>10</sup>の必要性を唱えた。このように見ると、巴金における「忘我」とは、個人の感情や精神が「私」自身や他者によって忘れ去られ、或いは「私」の内部で消滅することではなく、個人の外部に向けて拡張され、「私」以外の他者と一体化することを意味していたのである。

「私」と人類、個人と集団との関係について、巴金は更に、

---

<sup>9</sup> 巴金「死」、巴金『夢与醉』、5頁。

<sup>10</sup> 巴金「醉」（1937年5月）、巴金『夢与醉』、25頁。

「……」我々の血によって人類に幸福をもたらし、我々の死によって人類の繁栄を図らなければならない。我々の生命を人類の生命に結びつけなければならない。[……]<sup>11</sup>

と述べた。これは「死とは生命の変化、内的な生命の解放である」というカーペントナーの言葉を言い換えたものとして理解できようが、巴金は、そのような「私」における自己拡張を、人類の幸福や繁栄を実現させるためなら己の死すら厭わないという、自己犠牲の精神を具えたものとして捉えた。そして、「個人の滅亡」を賭して「集団の生存」を維持しようとする者なら、「個人に自己犠牲の順番が回ってきたときにも、彼は孤独を感じないはずだ」<sup>12</sup>と考えたのである。

かくして、巴金が自他の死を安らかに受け入れられるものとして考えるに至った背景には、「私」と人類との融合、人類の繁栄の実現という明確な目標が存在していたのである。

自己拡張を巡る巴金の思考は、1937年よりも前からすでに展開されていた。かつてフランスに留学（1927年1月-1928年12月）していた頃、クロボトキン『倫理学 その起原と発達』<sup>13</sup>を翻訳した巴金は、作中で取り上げられたフランスの哲学者ジャン＝マリ・ギュイヨー（Jean-Marie Guyau 1854-1888）の倫理学に触れ、自己犠牲の精神に深い感銘を受けた。<sup>14</sup>その後、日中戦争が勃発した1937年においても、巴金は8月に書かれた散文「生」のなかで、

<sup>11</sup> 巴金「酔」、巴金『夢与酔』、27頁。

<sup>12</sup> 巴金「酔」、巴金『夢与酔』、24頁。

<sup>13</sup> Kropotkin: *Ethics: Origin and Development*, New York: Dial Press 1924. 巴金の翻訳は以下の通り。克魯泡特金『人生哲学：其起源及其發展（上編）』（『克魯泡特金全集』第4巻、芾甘訳、上海自由書店、1928年9月）、克魯泡特金『人生哲学：其起源及其發展（下編）』（『克魯泡特金全集』第5巻、芾甘訳、上海自由書店、1929年7月）。1941年、巴金は書名を改め、克魯泡特金『倫理学的起原和發展』（『克魯泡特金全集』第10巻、平明書店、上海、1941年6月）として再版した。和訳本は、クロボトキン『倫理学 その起原と発達』（『クロボトキン全集』第12巻〔八太舟三訳、春陽堂、東京、1928年9月〕）。

<sup>14</sup> 互助や自己犠牲の特徴を持つと理解されてきた巴金の倫理道德への考察については、拙稿「巴金における自己犠牲の倫理」（『中国近現代文化研究』第19号、中国近現代文化研究会、2018年3月）を参照されたい。

生の目標とは豊かな横溢する生命である。年若くして早くも他界したフランスの哲学者ギュイヨールの言うように、「生命の一つの条件は消費することである。……個人の生命は他人のために放散されなければならない、必要なときには他人のために犠牲にしなければならない。……この犠牲こそ、真の生命の第一条件である」のだ。私はギュイヨールの言葉を信じる。私たちは誰でも、多くの同情、多くの愛、多くの喜び、多くの涙を持っている。それは、私たちが自身の生存を維持する上で必要とする量よりもはるかに多い。それゆえ、私たちはそれを他人に分け与えなければならない。さもないと私たちは内部の枯渇を感じるだろう。〔……〕<sup>15</sup>

と述べ、ギュイヨールの倫理学への関心を絶やさなかった。巴金は、「『生』の麗しさを保持し、多数の人の生存を維持するために、己の生命を躊躇うことなく捧げる」<sup>16</sup>という自己犠牲の精神に共感を寄せ続けたのである。

「集団の生存」は自己拡張によって維持され则认为一方で、巴金は更にもう一つの視点からこれを捉えていた。

〔……〕生を喜ばない生き物は一つとして存在しない。しかも、そこ〔あらゆる生き物の間——筆者〕ではある法則の支配を受けている。これこそ生の法則である。社会の進化、民族の盛衰、人類の繁栄はすべてこの法則に依拠して行なわれるのである。この法則は「互助」であり、「団結」である。〔……〕一つの民族はこれに頼ってこそ、他民族の侵略に抵抗し自身の生存を維持し得るのである。<sup>17</sup>

---

<sup>15</sup> 巴金「生」（1937年8月）、巴金『夢与醉』、44頁。

<sup>16</sup> 巴金「生」、巴金『夢与醉』、43頁。

<sup>17</sup> 巴金「生」、巴金『夢与醉』、44頁。

巴金の言う互助とは、クロボトキンが『相互扶助論』<sup>18</sup>のなかで論じた、あらゆる種族が集団生活を維持し生存競争を生き抜く上で必要不可欠な本能であり、また『倫理学 その起原と発達』のなかで考察した、人間における本能的な道德観の根源の一つで、正義と平等、自己犠牲と並んで彼自身の倫理学を構成する一要素である。このような互助を、巴金は「集団の生存」を維持するもう一つの方法として理解し、更には民族の生存を維持する手段に敷衍し解釈したのである。

かくして、「集団の生存」を巡る巴金の一連の思考は互助及び自己犠牲の精神を中心に展開されたのである。巴金が自他の死を安らかに受け入れられるものとして考えることができたのも、死というものを抗日戦争の目標である民族の生存の維持と結びつけたからではないか。

## 二、抗日戦争中における巴金の死生観と大衆動員

1937年7月7日、盧溝橋付近で夜間演習を行っていた支那駐屯軍が射撃を受けたことを契機に中国軍と衝突し、日中戦争の引き金となる盧溝橋事件が起こった。上海にいた巴金はその翌月、盧溝橋事件発生後の中国社会を振り返って以下のように述べた。

「……」ここ一か月ほど、華北の兵隊と人民は生命、職業、財産を犠牲にし、あらゆる苦痛に耐え侵略者に抵抗してきたが、少しも怯えた様子を見せることはなかった。百数十ポンドの爆弾、火災を引き起こす焼夷弾、大規模な焼き討ち、文化機構の爆破。多くの家屋が焼け崩れ、多くの人の生命が犠牲となり、多くの心血が灰燼に帰した。天津の市街区、北平の郊外、盧溝橋、宛平一帯の廢墟には、腐敗した死体が堆く積み上げられ、赤黒く生臭い血が塗りたく

<sup>18</sup> Kropotkin : *Mutual Aid : A Factor of Evolution*, London : William Heinemann 1902. 中訳本は、克魯泡特金『互助論』（「共学社社会経済叢書」、周佛海訳、商務印書館、上海、1921年12月）。克魯泡特金『互助論』（『克魯泡特金全集』第6巻、朱洗訳、平明書店、上海、1939年12月）。和訳本は、クロボトキン『相互扶助論』（『クロボトキン全集』第7巻、大杉栄訳、春陽堂、東京、1928年7月）。



られ、死者の泣き喚く声が響き渡った。しかし、華北の戦地の民衆と兵隊は依然と声高に「日本帝国主義を打倒せよ！」と叫んでおり、同時に、中国全土の兄弟姉妹の口から同じように高らかなこだまが発せられている。[……] <sup>19</sup>

華北の民衆と兵隊が死を恐れることなく敵軍への抵抗を強め、帝国主義への反抗に賛同する声が中国全土から寄せられている、というのである。巴金は、そのような勇敢な叫び声には人々の血と涙が含まれているが、それに慰めを与えるのは「我々はきっと最後に勝利を収めるのだ」という信念である、と考えた。<sup>20</sup>

盧溝橋事件発生後、戦火はやがて上海にも波及した。同年8月13日、日本海軍陸戦隊の中尉が上海西部の飛行場を偵察中に射殺されたことを受け、中国軍と日本海軍陸戦隊との間で戦端が開かれ第二次上海事変が勃発した。その翌日、大世界娯楽センター前の広場に爆弾が投下されたが、そこを通りかかった巴金は、8月16日に、

[……] 私は電車のなかから、道路の両側にいる一群また一群の難民が血塗れになって、手をつなぎ押し黙ったまま西へ進んでゆくのを見た。全員厳めしい顔つきで、恐怖や悲痛の表情はなく、まるで義に殉じ、重大な犠牲を払おうとしているかのようであった。<sup>21</sup>

と当時の状況を振り返った。実際、このときの空襲は、日本の軍艦を攻撃しようとした中国の爆撃機が日本軍の高射砲に射撃されたために起こした誤爆であり、日本軍によって行なわれたものではなかった。巴金が8月16日の時点でこの事実を知っていたかどうかは不明だが、このときの犠牲者や負傷者について、

---

<sup>19</sup> 巴金「站在十字街頭」（1937年8月7日）、巴金『控訴』（「烽火小叢書」第1種、烽火社、上海、1937年11月）、24頁。

<sup>20</sup> 巴金「站在十字街頭」、巴金『控訴』、24頁。

<sup>21</sup> 巴金「一点感想」（8月16日）、巴金『控訴』、26頁。

「……」 様々な階層の人が同じように一つの目標のために生命を犠牲にした。誰一人死を前に躊躇いを覚えた者はおらず、生きている人も誰一人不平を言った者はいない。[……] <sup>22</sup>

と述べているように、彼は、あらゆる人間が個人の生死を顧みることなく、己の命を侵略者に抵抗するという共通の目標のために差し出す覚悟を決めている、と捉えていた。

このほかにも、巴金は8月16日に、爆死した民衆か戦死した兵隊の二百体前後の死体が棺に納められるところを目の当たりにした。一連の体験を経て、巴金は、

「……」 我々は我らの民族の生存を勝ち取るために粉骨砕身するとはいえ、我々が滅びることはない。なぜなら、我々はまだ我らの民族の生命のなかに生きているからである。大衆のために生命を犠牲にした者は永遠に大衆から偲ばれるであろう。大衆とともに生命を賭した者にとって、死は恐るべきものでも、悲しむべきものでもないのだ。 <sup>23</sup>

と述べ、民族の生存を維持するためなら個人の死すら厭わない自己犠牲の精神を、現実的な死に直面した大衆のなかに見出したのである。

大衆における生と死をこのように捉えた巴金は、己の生と死に対してどのような姿勢を持っていたのだろうか。同年10月上旬のある日、巴金が人力車に乗っていたとき、「空中で機関銃の銃声が鳴り始め、三機の飛行機が私たちの頭上を旋回していた」 <sup>24</sup>にもかかわらず、彼は一年前に逝去した魯迅（1881-1936）のことを思い出した。数日後、この出来事に触れた際、巴金は、「魯迅先生の死と

---

<sup>22</sup> 巴金「一点感想」、巴金『控訴』、26頁。

<sup>23</sup> 巴金「一点感想」、巴金『控訴』、27頁。

<sup>24</sup> 巴金「深的懷念」（1937年10月在上海）、巴金『無題』（「烽火文叢」之1、烽火社、重慶、1941年6月）、51頁。

ともに「……」民族解放運動は一人の勇敢な戦士を失った」<sup>25</sup>という一年前に綴った言葉のほか、数日前に書いた、

「……」中国全土の子女の心は一枚の磐石となり、中国全土の子女の力は一筋の鉄流を形成した。これは我々の民族解放戦争において逆らうことのできない力であり、横暴な侵略者を屈服するまでやっつけることができるのだ。<sup>26</sup>

という言葉をそれぞれ引用し、民族解放戦争の目標である「自由且つ平等な新中国の実現」<sup>27</sup>は団結した民衆による侵略者への抵抗のもとに達成されとの信念を表明した。巴金は機関銃の掃射と飛行機の旋回という戦争体験をしたが、当時の状況を描くに当たり、死への想像を語るのではなく、魯迅への思いを通して民族解放運動の行方について述べたのも、己の死を覚悟し、自らの生命を抗日戦争に結びつけたからではないか。

かくして巴金の描く大衆も彼自身も、民族の生存を維持するために自己犠牲の精神を貫いたのである。巴金が大衆及び彼自身のこのような姿を描き出したのは、読者が自己犠牲の精神を掲げ民族解放運動に参加できるよう宣伝し、大衆動員を図るためだったのではないか。

さて、第二次上海事変勃発後、同年11月には上海が日本軍に占領され、戦線は南京や武漢など中国全土に拡大し日中戦争が全面化した。同年12月、上海にいた巴金はこの「孤島」を「窮屈な監獄」と形容し、そこでの不自由な生活の「息苦しさ」に言及しながらも、

「……」私は決して失敗主義者でもなければ、悲観派でもない。正真正銘

---

<sup>25</sup> 巴金「深的懷念」、巴金『無題』、51頁。原文は、巴金「悼魯迅先生」（1936年10月在上海）、巴金『無題』、49頁。

<sup>26</sup> 巴金「深的懷念」、巴金『無題』、52頁。

<sup>27</sup> 巴金「深的懷念」、巴金『無題』、52頁。

最後の勝利を信じている極めて少数の人間の一人に、私は数えられるはずだ。  
私は今なお友人たちに私の楽観的な言論を発表している。[……] <sup>28</sup>

と述べ、抗日戦争の勝利への信念を堅持し続けた。しかし、巴金を取り巻く環境は日中戦争開戦直後に比べ大きく変化したようで、

[……] 三、四か月前に抗日戦争を高らかに叫び、意気軒昂で、青年の指導者や民衆の指導者を自任した人々は、戦々恐々として安全な場所に逃れたか、さもなければ意気阻喪して漢奸の言論に征服された。一部の大きな新聞さえ徐々に態度を変えた。[……] <sup>29</sup>

というのである。敵軍への抵抗が一部の人の間で下火となり、対日協力者が現れるなか、巴金は、

[……]「孤島」にいる中国人に今最も必要なのは最後の勝利への信念である。彼らの信念はすでに動揺しており、ほかの人によってそれを不動のものにする必要がある。今日の暗雲は青年一人ひとりの目を遮っており、彼らに明るい将来への信念を失わせてしまった。若い心は往々にして折れやすいもので、嵐の衝撃に耐えられるものではない。彼らが失望し苦しみ悩むとき、誰かが彼らに少しの慰め、励まし、そして温もりを与えてあげる必要がある。[……] <sup>30</sup>

と考え、青年たちに民族解放への信念を根づかせ、彼らを抗日戦争に動員することの必要性を痛感した。

---

<sup>28</sup> 巴金「感想（1）——在『孤島』」（1937年12月）、巴金『感想』（「烽火小叢書」第8種、烽火社、重慶、1939年7月）、2頁。

<sup>29</sup> 巴金「感想（1）——在『孤島』」、巴金『感想』、2頁。

<sup>30</sup> 巴金「感想（1）——在『孤島』」、巴金『感想』、2頁。

1938年3月に香港経由で広州に渡った後も、巴金は同年8月に、

「……」一部の人（極めて少数の人）は、抗日戦争のなかでこのような熱意と誠意〔個人の生命や財産に執着せず、それらをすべて抗日戦争に捧げること——筆者〕を喪失し（彼らの以前の熱意と誠意も偽りのものであったのかも知れない）、態度を変え、その後、あろうことか奇妙な言論を発表し、或いはいつそのこと非合法組織に降伏し侵略者のお先棒を担ぐようになった。〔……〕四億五千万人の大きな足のもとでは、このような人たちは数匹の蟻に過ぎず、早晚踏み殺されるのだ。<sup>31</sup>

と述べており、抗日戦争を阻む勢力の存在を懸念し、その排除を唱えた。大衆運動を促すためにも、巴金はそのような勢力を以下の通り批判的に考察している。

巴金によれば、まず、一年近く続けられてきた抗日戦争のなかに、「我々が今もなお以前と同様に勇敢に敵と戦っていることが考えられず」、抗日戦争に対する悲観的な言論を繰り返す「失敗主義者」がいるという。彼らは、華北での戦闘の敗北に弁舌を振るい、大世界娯楽センターが空襲を受けたときに租界に逃げ込み、中国の軍隊が上海から撤退すると講和の用意があると予言し、南京の陥落を期待し武漢作戦を疑問視した。言い換えれば、彼らは「日本の武装解除を考える勇氣はなく、ひたすら中国の武装解除を待ち望むことしかできない」のだ。それゆえ、目先の安逸を貪り個人の利益のみを重視する「失敗主義者」は、自由の実現という民族全体の要求とは相反することを主張しており、大きな勢力を形成するより前に現実によって打ち砕かれるに違いない。<sup>32</sup>

次に、一部の人の間で、抗日戦争に勝利した暁には「日本を征服し、世界を征服する」ことが唱えられている。確かに、「中国に来て戦争をする日本の兵隊は

<sup>31</sup> 巴金「感想（2）——在広州」（1938年8月）、巴金『感想』、5頁。

<sup>32</sup> 巴金「失敗主義者」（1938年8月）、巴金『感想』、10-12頁。

我々の敵であり、今度の戦争を発動した日本の統治者は我々の敵であり、この戦争を積極的に支持する日本社会の様々な指導者は我々の敵である。これは間違いないことであり、我々は必ずや彼らを倒さなければならない」。しかし、抗日戦争は、「日本の帝国主義、ファシズムによる侵略に抵抗するために発動され」、「自らの生存を求め、自らの独立を図る」ために展開されたものであり、「侵略の野心や征服の欲望を少しも持っていない」のである。他国を征服する野望を抱く「国家主義者」は侵略者とほとんど変わらないのである。<sup>33</sup>

第三に、抗日戦争の行く末を過度に楽観視し、「抗戦第一」、「最後に勝利する」というスローガンを掲げ宣伝して回る者がいる。しかし、彼らは「我々がいかにして最後の勝利を戦い取るべきかを知らず、我々がどうすれば最後の勝利を手にすることができるのかも理解していない」のだ。最後の勝利を収めるためには、「全国民の努力を一つの目標に集中させ、国民一人ひとりがその人の最良の力を発揮しなければならない」。空襲の脅威に曝されながら各地で様々な職業に就いている人々は注目を集めることはないものの、彼らこそ生産の増大、建設の進展、交通の維持、教育の展開などの担い手なのであり、こうした銃後の活躍こそ抗日戦争を勝利に導くものなのである。盲目的な宣伝を行なう「最後勝利主義者」は日本軍の崩壊を期待するばかりで、「大衆動員という重要な任務を見下している」のである。<sup>34</sup>

最後に、抗日戦争を巡る言論において、千篇一律に、日本の中国征服の野心と中国の受けた屈辱、中国の抗日戦争の発動、抗日戦争の各段階、日本における経済的崩壊と軍事的崩壊、抗日戦争の最終的な勝利という展開で図式的な文章を書く「公式主義者」が増えてきている。彼らは、そのような一般受けする言論を読者に信じ込ませ、大衆を呼びかけ防御の任務に当たらせようとするが、自身ではその言論を信じておらず、防御が本当に必要なときには自らの直接的な利益を懸

<sup>33</sup> 巴金「国家主義者」(1938年8月)、巴金『感想』、13-16頁。

<sup>34</sup> 巴金「最後勝利主義者」(1938年9月)、巴金『感想』、17-19頁。

念して、その場を逃れ他所の土地に移るのである。計画的な大衆動員を軽視する点では「最後勝利主義者」と同様であるが、「公式主義者」は更に政治機構の改革をも軽んじている。大衆における抗日戦争への参加は汚職と腐敗に阻まれる場合が少なくないが、大衆を搾取し汚職と腐敗を生み出すような政治機構の改革こそ、計画的な大衆動員と並んで、抗日戦争にとって急務なのである。<sup>35</sup>

かくして、巴金は抗日戦争を阻む勢力を大まかに、その行く末を悲観視し個人の利益を最優先する「失敗主義者」、敵国への侵略を唱える「国家主義者」、専らスローガンを宣伝し大衆動員を軽視する「最後勝利主義者」、自身では信じていない一般論を大衆に宣伝する「公式主義者」に分類した。その作業を通して、民族の生存を維持し、独立を獲得し、自由を実現させるには大衆動員を図る必要があるとの立場を表明したが、巴金は更に戦時中に目の当たりにした大衆運動の実態を取り上げている。

例えば、1937年8月に第二次上海事変が勃発した際、日本軍への砲撃によって、人々の抗日戦争に対する疑念が払拭され、民族解放への期待が高まり、「我々同胞の間の隔たりや偏見は瞬く間に消え失せ」人々は心を一つにした。「ほかの人に動員されるより前に、民衆は自ら立ち上がり」、抗日戦争の勝利という共通の目標のために忙しく働き、宣伝、募金、救護活動、難民援助などに取り組んだ。そればかりでなく、若者からお年寄りまでが自身の持ち物を差し出し、「私はこの神聖なる抗日戦争のために自身のすべてを犠牲にしたいのだ」と言って、仕事を与えてもらえるよう一部の機関や団体に頼み込んだ。「人々はただ、自身が犠牲にしてきたものはまだ不十分であり、残された僅かな力も捧げなければならないと思っているだけなのだ」という。<sup>36</sup>

上海から広州に移ってから、巴金は度々空襲を経験し、以前にも増して他者の死を目の当たりにする機会が多くなった。彼によれば、「この都市に住むすべて

<sup>35</sup> 巴金「公式主義者」（1938年10月）、巴金『感想』、20-24頁。

<sup>36</sup> 巴金「感想（2）——在広州」、巴金『感想』、4-6頁。

の人間はみな爆死する可能性がある」とはいえ、彼らは死を愛してもいなければ恐れてもおらず、『爆死』をありきたりなものと見ている」。そして、『死』が差し迫ると、人はいっそう『生』を大事にする」ようになり、「死」の脅威は「人と人との関係をより緊密なものにし、ここの住民の団結を更に深めさせた」のである。例えば、空襲に見舞われると、「多くの人は自発的に自身の家屋や日用品を差し出し、老弱な同胞たちの避難場所として使わせ、壮丁たちは危険を顧みずに爆破された家屋を掘り起こし、負傷した同胞の救出に当たった」。また、1938年8月13日の早朝、敵機が広州の上空に侵入したときでさえ、危険区域とされた永漢分局に設けられた献金台の責任者は死を恐れることなく職責を全うしたという。<sup>37</sup>

このほかにも、同年8月13日、巴金は漢民分局の前を通り過ぎたとき、献金台の前で痩せぎすの男を見かけた。男は空襲が行なわれた数日前、巴金の住まいの向かいの家の前に座って、階段の下に生えている青草を筆り、噓せることもなく慣れた様子でゆっくりと食べていた。男は乞食であったが、献金台にやってきたのは恵んでもらったお金を寄付するためであった。男が空襲や飢餓による死を顧みることなく「この僅かな財産を捧げたのは、人々が心を一つにしてともに敵をやっつけ『彼ら』を追い出してこそ、はじめて生命を維持し平穏な生活を送ることができるのだ、と信じていたからである」。<sup>38</sup>大衆による募金活動は上海においても積極的に行なわれていたようで、「ある子どもは自ら進んで貯金箱を割り、数年間の貯金を父親に渡し募金所まで持って行ってもらい」、「ある女中さんは微笑みながら自らの手で、限りある賃金を、募金にやって来た女子学生に渡した」という。<sup>39</sup>

<sup>37</sup> 巴金「広州在轟炸中」（8月15日）、巴金『旅途通訊』（「少年読物小叢刊第1集」6、文化生活出版社、上海、1939年3月）、11-14頁。

<sup>38</sup> 巴金「在広州 2 8月13日」、巴金『黒土』（「文学小叢刊」第1集、文化生活出版社、上海、1939年10月）、25-28頁。

<sup>39</sup> 巴金「感想（2）——在広州」、巴金『感想』、5頁。



以上のように、上海及び広州の民衆は、己の生死を顧みずに他者を救済し責任を持って任務に当たり、個人の所有物や財産を他者と共有したのであり、ともに団結し自らを主体する大衆運動を積極的に展開したのである。巴金は、このような互助及び自己犠牲の精神に支えられた大衆運動こそ、今後更なる大衆動員を図る上で重視すべきものであると考えたのではないか。

その後も、巴金は1939年12月にクロボトキン『相互扶助論』の中訳本が出版された際、本書に寄せた「前記」において、一部の人が聞き齧った情報を頼りに「この時期〔抗日戦争中——筆者〕に互助を唱えることは民族解放戦争への熱意と誠意を消滅させることになる」と考えていることを取り上げ、そのような懸念はクロボトキンが第一次世界大戦中に再版された『互助論』（英文廉価版）に寄せた序文によって払拭されると述べた。<sup>40</sup>実際、クロボトキンは序文のなかで、第一次世界大戦中に行なわれている非戦闘員への大虐殺、大衆の食料への略奪といった「恐怖すべきことのために言い訳をしようとする人は好んで『生存競争』を持ち出し口実にする」が、「統治者によって組織された虐殺と絶滅の方法のほかにも、同時に無数の自発的な互助の行動が存在する」のであり、「一つの民族が歴史上の苦難の時期を乗り越える」ためには「数多くの民衆ができる限り彼らの創造的、建設的な天賦を発揮する」必要があると書いている。そしてその実例として、ロシアの農婦たちがドイツやオーストリアの捕虜にパンやお金を渡したこと、数千人もの男女が敵か味方かを問わず負傷兵の看護に当たったこと、フランス各地で「共同台所」や「共産食堂」が設けられたこと、ロシアの民衆が蹂躪されたポーランドに対して援助を与えたことなどを挙げた。<sup>41</sup>巴金もまた、「我々が目下受けている侵略も『生存競争』への誤った解釈のもとで進められている」と指摘し、「互助（同種間の団結）」こそ「外敵の侵略に抵抗するときでも、

<sup>40</sup> 巴金「前記」（1939年6月18日）、克魯泡特金『互助論』（朱洗訳）、3頁。

<sup>41</sup> 克魯泡特金「英文普及本序」（1914年11月。巴金訳、1939年6月）、克魯泡特金『互助論』（朱洗訳）、7-10頁。

或いは残酷な自然と闘争を繰り広げるときでも、最良の武器である」と強調した。<sup>42</sup>

かくして巴金は、侵略者に抵抗し民族の生存を維持するための抗日戦争は互助及び自己犠牲の精神によって支えられなければならないと考えたのであり、そのような思考を大衆運動の実態及び思想の双方から読者に宣伝したのである。そして、個人の犠牲を抗日運動の発展に直接結びつけることで、巴金は迫り来る死を想像する大衆の心のうちに沸き起こる様々な感情も解消されると考えたのである。

## おわりに

本稿では、抗日戦争時期における巴金の死生観と大衆動員との関連性について考察した。日中戦争が勃発する直前、巴金は 1920 年代初期における戦争体験を振り返りながら、「自己の死」を恐れる一方で「他者の死」を穏やかなものとして捉えるという過去における対立的な死生観について語った。そのような死生観は日中戦争前夜に至ると大きく変化し、巴金は自他の死に関わらず死というものを安らかに受け入れ新たな生命を誕生させる源泉として理解するようになった。なぜなら、死とは自然を構成する諸要素と個人との融合を意味すると考えたからである。巴金は更に、そのような自己拡張を個人と集団との関係においても認めており、個人の死を民族の生存と直接結びつけて理解したのである。このような思考を支えたものこそ、巴金が 1920 年代後半に受容したギュイヨールの説く自己犠牲の精神及びクロポトキンの説く互助だったのである。

その後、日中戦争が勃発すると、巴金は上海や広州において、戦死者及び死と隣り合わせの生活を送る民衆を多く目の当たりにした。巴金は彼らの姿に、個人における死への躊躇いや不安、恐怖ではなく、己の死を侵略者への抵抗、民族の生存の維持に結びつけるという自己犠牲の精神を認めた。しかし、日中戦争が全

---

<sup>42</sup> 巴金「前記」、克魯泡特金『互助論』（朱洗訳）、3-4 頁。

面化するに従い、それを阻む勢力が現れ、人々の民族解放への信念を揺るがした。巴金はそのような勢力を分析しつつ、大衆を主体とする抗日運動の重要性を説き、互助及び自己犠牲の精神を貫いた大衆運動の実際状況をいくつか紹介した。そのような言論を通して、巴金は互助及び自己犠牲の精神を抗日戦争における大衆運動の行動原理に据えるという考え方を表明したのである。

かくして、日中戦争前夜における個人の死を巡る巴金の思考、並びに戦時中における民族の生存のための大衆運動に対する巴金の分析と評価は、いずれも互助及び自己犠牲の精神に基づいて展開されたのである。これら一連の言論を通して、巴金は自身の思想的立場を伝えたばかりでなく、読者に民族解放への信念を抱かせ抗日戦争への参加を促したと言えよう。とはいえ、大衆動員を図るために、巴金は思想という外在的な要素の宣伝のみを頼りにしたのではなく、それとは性質を異にする人間の本能や感情といった内面的な要素にも訴えようとした。後者の場合もまた、人間の死を描くことによって行なわれたのだが、紙幅の関係で具体的な考察は別稿に譲りたい。

## 参考文献：

巴金『控訴』（「烽火小叢書」第1種、烽火社、上海、1937年11月）。

巴金『夢与醉』（開明書店、上海、1938年9月）。

巴金『旅途通訊』（「少年讀物小叢刊第1集」6、文化生活出版社、上海、1939年3月）。

巴金『感想』（「烽火小叢書」第8種、烽火社、重慶、1939年7月）。

巴金『黒土』（「文学小叢刊」第1集、文化生活出版社、上海、1939年10月）。

巴金『無題』（「烽火文叢」之1、烽火社、重慶、1941年6月）。